

【翻訳】1642年1月24日、レギウスからデカルトに 宛てられた書簡

持 田 辰 郎

本稿は、「1642年1月24日付レギウスからデカルト宛の書簡」として、デカルトの全集・各書簡集に採録されている¹⁾文献の翻訳である。ただし、「レギウスからデカルトへ」の書簡とされるものはすべて、書簡文自体が残されているわけではない。バイエによる伝記²⁾の中に、当該書簡に言及した記事や欄外メモがあり、それらによって再構成されたものである。それゆえ各書簡とされるものは、実は「バイエによる伝記の関係箇所抜粋」に他ならず、本書簡も例外ではない。そもそも、本書簡の存在自体、本訳稿の末尾にあるバイエの証言「(レギウスは)翌年1月24日にデカルト氏に手紙を書き、それまでに起きたことのすべてを伝えた」を根拠とする。

ただし、本書簡の場合にはもう一つの文献が関与する。AT版の本書簡に対する前文にはこのようにある。

レギウスの15番目のデカルト宛手書き文書であるこの書簡は、おそらく、12月8日のテーゼ以後にユトレヒトで起こったすべての話を含んでいたであろう。実際、バイエはそこに、ユトレヒト大学の監修によって公刊された公式の「報告」書から訳された文を混ぜ合わせており、我々はそれをラテン語原文から詳細に採録する(AT-3:487)。

すなわち、いわゆる「ユトレヒトの争い」に関し、当の大学が作成したラテン語の経過報告書が残されているのであって³⁾、バイエ自身、彼は手にすることのできたレギウスの書簡自体とともに、この報告書をも利用して伝記を記述した。それゆえ、AT版の編者たちは、「1641年12月8日以降、翌年1月24日までにユトレヒトで起きたことのすべて」を再構成するにあたり、この報告書のラテン語原文を柱とし、隙間をバイエの記述で埋めることとしたのである⁴⁾。

したがって、本「書簡」は二つの文献から取り出された五つの文書の貼り合わせである。我々は便宜上、それらに【A】から【E】までの記号を付すこととするが、【A】と【C】がユトレヒト大学経過報告書、【B】、【D】および【E】がバイエの記述である。

あらかじめ、それぞれの内容を概観しておこう。【A】は、AT版前文の表現で言えば「12月8日のレギウスのテーゼに答えて、12月18日と24日に支持されたテーゼにヴォエティウスが付け加えさせた三つの系」(AT-3:487)である。抗争の一つの大きな山場は12月8日のレギウスのテーゼであった。そこには「人間は偶有性による存在である」という主張が含まれており、デカルトはその表現の軽率さについてすでに弟子のレギウスを叱責した⁵⁾ところのものであるが、彼らに敵対する「旧哲学」側の総師、当時大学総長であった神学者ヴォエティウスの対応は素早かった。12月18日以降に討論が予定されていた神学的なテーゼに、急遽デカルト・レギウス批判の「系」を付け加えさせたのである。【A】がその全文、【B】はそれに付したバイエの解説である。

【C】には、「系」が付されることを知ってのレギウスの行動、彼の後ろ盾でデカルトの友人たるユトレヒト市執政官ファンデル・ホルクの調停、ヴォエティウスないし彼の側によるその受諾等々、「系」が引き起こした波紋が描かれている。ホルクの指示により、「系」は一部修正されることとなった。

【D】は、「系」を含むテーゼの討論会の模様である。【C】後半の、やや友好的とも思われる様子から一転し、討論会自体はやはり激しい抗争の場となったことが見て取れる。

最後の【E】の部分が「1月24日付書簡」それ自体についてのバイエの証言である。ヴォエティウスに対し書面で回答する決心をしたレギウスは、師たるデカルトに、これまでの経過を伝えるとともに、彼が準備した答弁を送ったわけである。

本訳稿の焦点は、やはり【A】、すなわちヴォエティウスの「系」の全文であろう。「人間は偶有性による存在である」というテーゼ、地球の運動、実体的形相という三つの論点は、いずれも新旧両哲学の抗争の焦点たるに相応しいが、それらについて、これまで顧みられることのなかった「旧哲学側の」生の文章だからである。我々はバイエによるその要旨も註に付すこととするが、要旨のみでは感ずることのできない彼らの思いが伝わるものとなっている。

また、ユトレヒト紛争を理解せんとするとき、【C】に描かれた人間模様も無視することはできない。哲学における争いとはいえ、それらを担っていたのは各々の立場の人間たちであり、争いの経過は彼らのひととに依存するのである。

【A】と【C】は大学の経過報告書からのものである。常にデカルト側に好意的なバイエと異なり、中立的な報告と思われる。なお、訳文中の鉤括弧内は訳者の補足である。

【A】系⁶⁾

神学生たちに必要とされる警告を、神学部の判断と同意に供すべく、いつもの時刻と場所において12月18日、さらに24日と真剣かつ学究的に討論するために我々が提出する系

I. タウレルス⁷⁾(彼をハイデルブルクの神学者たちは、ヴォルスティウスの論文『神について』に対する彼らの判決において「無神論の医者」と呼び、1610年のオランダ教会会議の代表に報告した)の『哲学の凱旋』、前置きの定理、D4, D5における「逆説的な」主張は、我らの同国人ダヴィド・ゴルラエウス⁸⁾が神学の勉強を始める際に、あるいはその勉強の決心する際に目眩がしてよろめき、若者の無鉄砲さから『哲学の練習』、練習14, 267頁に採用を望んだものであるが、それは「魂と身体から構成された人間は、偶有性による(per accidens)存在、一であり、実際それ自体による(per se)のではない」と確言するものであり、自然学の真理と衝突するのみならず(これについては、我々は自然学者たちが説明すべきこととして残したい)、形而上学、霊物学⁹⁾および神学の真理とも衝突する。それゆえ我々は、一つの不条理が無分別に与えられると他の多くの不条理が引き続き、最初は小さな誤謬が最後には大きな誤謬となることに警戒するよう、我らが学生たちに警告する。

II. 日ごと、および年ごとの地球の回転(これを我々の時代にケプラーや他の少なからぬ数学者たちが忘却の闇から明るみに出してしまった¹⁰⁾)は、聖なる書の神的啓示の真理に直接かつ明

らかに反する。また、健全で分別ある哲学がこれまで豊かに積み上げてきた自然の光による理論とも一致しない。それとは反対のものをもたらすのが慣わしのある種の懷疑、つまり一部不確実で一部不条理な推測は、真理に貪欲な精神を鎮めるいかなる堅固な哲学をも基礎づけることはできない。したがって、いまのところ我々には聖書への崇敬と、理性ないし自然の光が前もって下したある種の判断、地球の静止が残っている。少なくとも反対の主張を妨げており、穏当な精神による「判断停止」ないし知ある無知¹¹⁾を支持している。

Ⅲ. ものの実体的形相とその固有で特有の能力ないし能動的な性質を、したがってものの特有で区別された本性を否定する哲学（これをこの我々の時代にタウレルス、ゴルラエウスおよびバソニウス¹²⁾が舞台に呼び戻そうと努めた）は、いまのところモーゼの聖なる自然学と十分には整合させえないと思われる。[この点において]我々が学生たちはダナエウス¹³⁾、ザンキウス¹⁴⁾、『創世記』等々の注釈者たち、ロンバルドゥス¹⁵⁾とトマスの学者たちを参照する。ついで、我々は、究極のものについていったい何であるかということは哲学者たちの討議に残しておくが、少なくともこの一つの覚書を我々が学生たちに提示したい。[つまり、]かの形相を排斥しようとするアキラエウスの議論は次々と疑いを生み出しているということである。それはこうである。形相の本質と存在は、その起源ないし起源の様態が不確実であり、その及ぶものがそれと他とそれにおいて満足するようには説明されないがゆえに否定される。ひとたびこの危険な公理が成り立つと、虚言に、懷疑主義に、そして人間精神の好き放題に陥ることとなろう。理性的な魂は与えられないと、母親の子宮における人間の発生と懐胎もないと、風も光もないと、神的ベルソナの発出もキリストの受肉ないし神人結合もないと、原罪もないと、奇跡もないと、預言もないと、人間の精神と意思への神の流入もないと、神の恩寵による人間の復活もないと、人間の身体内およびその精神をめぐる悪魔の憑依もない等々と、[これらのすべてを]論証することとなろう。これらの起源の様態は、経験と多くの聖書の文言（『詩篇』139, 『伝導の書』I, 10, 3）の証言によれば説明できないのであって、最も知ある者でも知ある無知を認めざるをえず、洞察された真理の証拠によってではなく隠された真理の深淵によってその精神を鎮めるしかないのである。（ユトレヒト大学経過報告書）

【B】これらの系と続く一つの補遺は、ローマの聖年についての神学的テーゼとともに12月18日、23日および24日、公的に主張された。しかし、ヴォエティウスの意向は、神学の他の教授たち、そして司祭ないし説教師であったすべての神学者たちにさえあらかじめ著名をさせ、ついで同僚の何人かを行政官に派遣し、その医者、すなわちレギウス氏は宗務局や教会会議によって異端と断罪され、タウレルスやゴルラエウスと同等に置かれるべきという見解をたきつけ、そのようにして行政官が彼を適切に教授職から免ずることを余儀なくさせようというものであった。（Baillet-2: 146）

【C】この医者〔レギウス〕は、いかなる報告や推測によってでかわからないが、いまやほとんど配布されるばかりとなっていた聖年についての神学討論に、彼自身の逆説に言及する少なからぬ系が付け加えられることを嗅ぎつけて、なんとしてでもと、配下の者たちを用い印刷屋で当該の系を探した。さらには、不平を言いながら走り回り、討論を（少なくとも系に対する討論を）

妨げるべく、あらゆる策を講じた。このようなことを常に私的な権限で、自分の判断でおこなったのであり、大学総長であり討論の主宰者である神学者〔ヴォエティウス〕にも、大学評議会にも、神学部にも（この問題はこれらに及び始めていた）前もって伝えはしなかった。彼自身の逆説の討論に対しては総長も大学評議会もまだ何の権限も行使していないこの段階で、彼による権限のこの不当な行使は、教授たちを非常に不快にしないはずはなかった。

だがしかし、この医者は、系を含んだ紙片を二人の高貴なる執政官閣下のうちの一人〔ファンデル・ホルク〕に印刷屋から送らせることをなすとげた。閣下は系を読まれ、医者のために事柄自体を〔忠実に〕守り提示の仕方と形式を少々変えるよう、神学者に対し介入された。すなわち、医者の希望と名誉を考慮し、主として系の前文に神学部の名が記されていることを問題とされ、それを完全に削除し過激な表現を抑えるようにと〔指示されたのである〕。

執政官閣下は、医者に対しかかる無分別について自ら嚴重に警告したと付言された。加えて、これからは自分もいっそう注意深くし、今後は医者が自分の分を守りかかる逆説から遠ざけるようにさせると、そしてそれどころか翌日には神学部へ赴き、学部〔の教授たち〕の面前であらゆる点について満足させると保証された。このことは12月16日のことであった。

神学者は執政官閣下に（大学および自らへの閣下の貢献に対しては語る言葉もないと考えていたので）自ら労をとることを約束し、翌12月17日、8時に学部の集会を招集して、その場で執政官閣下の要請と、医者の名における保証された約束を説明した。

9時頃、その同じ集会に医者が立ち、自分の主張（それに対し系が対置され、とりわけ人間の魂と身体の結合についてのもの）が神学に抵触する、あるいは危険なものであることを自分は知らなかったと証言した。そして、自分にはわずかたりといえども神学を損なう、あるいはそれと衝突する意図はないと誓約した。

神学者たちは友好的に、大学を混乱させる危険で論争を呼ぶ、かの逆説から遠ざかるよう、そしてむしろ自らの任務を誠実かつ忠実に果たし栄誉あるものとするよう彼を励ました。さらに、系（印刷屋から提出されたプロバと呼ばれるその試し刷りを手にして）のどの言葉を変更ないし削除して欲しいのかを示すようにと差し出した。そのことが為されると、彼ら自身が医者の示した箇所以上に抹消し、誓約によって彼らに委ねられた若者たちの安全と神学およびその関心事が保証される限り、誰もが好意をもって彼を悪いようにはしないと保証した。他方、医者は神学者たちに、学校の暦に従って準備してきた討論を祭日前に提出した方がよいのか、それとも延期して、最近の混乱が徐々に消え時と事態が変わるまでしばらく討論から遠ざかった方がよいのか、助言を求めた。

医者自身、もし神学者たちがそのように〔延期を〕勧めるなら、それは自分にも無思慮なこととは思われないという意向を十分に示していた。そして〔延期の〕勧奨が為された。

かかる事態の推移は、大学の総長で討論の主宰者である神学者によってただちに執政官閣下に報告されたが、神学者は自分にとってすべてがまことに好ましいと弁明した。（ユトレヒト大学経過報告書）

【D】 それゆえ系は訂正された。その表題から神学部の名は削除され、そして、個人的にレギウ

ス氏とデカルト氏と見なされうる箇所は修正された。しかし、テーゼの各箇所は、その各々が彼らの著作ないし彼らの意見によって名指されたり示されたりしているのだが、すでに印刷されており、執政官の警告はこの点では役に立たず、ヴォエティウスはまことに幸いにも彼の不誠実と悪意を覆い隠す口実を得たと信じた。

これらのテーゼは、最初の討論として12月18日に主張され、クリスマスに先立つ2日間続けられた。答弁者はランベルト・ファンデン・ワテルラエト氏¹⁶⁾であり、新しい意見に敵対するむきだしの熱意によって議長（ヴォエティウス）と同様に注目をひいたが、新しい意見もほとんどすべてがレギウス氏の学生であった反対者たちによって同等の熱意で支持された。

議長はデカルト氏についてそこで十分に語られていないことを見て取って、討論の最後に、反対者の一人に答弁で困らせるべくいくつかの非常に困難な問題をふっかけてたが、しかし好意的に聞く気などはもっていなかった。そういうわけで、反対者が新しい哲学の原理に一致した答弁によってその問題に満足させようとし始めたのを見るや、彼は、突然それを遮り、「尋常の哲学の方法で満足できない者は、デカルトどのから別の方法を期待するがよい、あたかもユダヤ人たちが、彼らにすべての真理を教えてくれるはずのエリアを待ち望むように」と言った。(Baillet-2: 147-148)

【E】 レギウス氏は、……ヴォエティウスのテーゼに書面で回答する決心をした。彼は翌年1月24日にデカルト氏に手紙を書き、それまでに起きたことのすべてを伝え、今後についての意見を求めた。彼はデカルト氏に、人々の気持ちちがどれほど彼に厳しくなっているか、ヴォエティウスの党派がどれほど日々強くなっているかを強調した。そして彼の保護者である執政官ファンデル・ホルク氏は、彼が沈黙を保つか、あるいはヴォエティウスや他の教授たちを扱う際には可能な限りの穏和さと敬意をこめて覆い隠すようにという意見であったことを付け加えた。彼は同時に、ヴォエティウスのテーゼに対して準備した答弁を送ったが、それは、彼の他の著作に対するのと同じ権利でデカルトがそれを吟味するためであった。(Baillet-2: 148-149)

註

- 1) “*Œuvres de Descartes*”, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, 12 tomes, Paris, 1897-1913, 1996, t. III (以下, AT, 第3巻はAT-3と略記する), pp. 487-491. “*Descartes. Correspondance*”, publiée par Ch. Adam et G. Milhaud, 8 tomes, Paris, 1936-1963, t. V (以下, AM, 第5巻はAM-5と略記する), 109-110. “René Descartes, *Toute le Lettre 1619-1650*”, a cura di Giulia Belgioioso, Bologna, 2009 (以下, Bと略記する), pp. 1572-1579. “The Correspondence between Descartes and Regius”, by J. J. F. M. Bos (以下, Bosと略記する), pp. 95-97. 以上の各版については、各々の略号の後に：で結んで頁数を示す。なお、本書簡に対するデカルトの返書は、拙訳『1642年1月、デカルトからレギウスに宛てられた書簡』, 名古屋学院大学論集, Vol. 46, No. 2, 2010, pp. 63-79に訳されている。その後の展開については、拙訳『1642年、デカルトからレギウスに宛てられた3通の書簡』, 名古屋学院大学論集, Vol. 47, No. 1, 2010, pp. 61-69参照。
- 2) A. Baillet, “*La vie de Monsieur Descartes*”, 2 toms, Paris. 1691 (Genève, 1970). 以下, その第2巻をBaillet-2と略記し, その後に：で結んで頁数を示す。

- 3) “Testimonium Academiae Ultrajectinae, et Narratio Historica”, Utrecht, 1643. なお, Descartes/Schoock, “La Querelle d’Utrecht”, ed. by Verbeek, Paris, 1988 (以下 Querelle と略記する), pp. 79-123 にその全文の仏訳がある。
- 4) B版はAT版に従っている。AM版とBosは、バイエの証言のみにとどめている。
- 5) 1641年12月中頃, デカルトからレギウス宛書簡(AT-3: 459-464)。
- 6) これらの三つの系を, バイエは以下のように要約して報告している。
 1. 魂と身体から構成された人間が偶然的存在であって自体的存在でないと教える, 無神論者タウレルスやダヴィド・ゴルラエウスの説は不合理かつ誤謬である。
 2. ケプラーその他によって導入された地球の運動は, 聖なる書の権威と真向から明白に衝突する。それはこれまでの哲学が教えてきた自然の光の論拠に全く適合しない。
 3. 事物の実体的形相をそれらに固有で種的な能力とともに, あるいはそれらの現実的性質とともに捨て去り, したがって事物の判明かつ種的な本性を斥けるところの哲学, タウレルス, ゴルラエウス, バソニウスが現に導入に努めて来た哲学は, モーゼの自然学とも, 聖書が我々に教える一切の事柄とも合致しない。その哲学は危険であり, 懐疑論に役立ち, 理性的魂, 三位一体における神的ペルソナの発出, イエス・キリストの受肉, 原罪, 奇跡, 預言, 我々の再生の栄光および悪魔の實在的憑依に関する我らの信仰を破壊するものである。(Baillet-2: 146)
- 7) Nicolaus Taurellus (1547-1606)。アリストテレス主義, とりわけアヴェロイス主義への反対者。スイス人。
- 8) Gorlaeus. Querelle, p. 467によれば, 彼はタウレルスの主張を採用していない。また, ヴォエティウスは彼を個人的に知っていたはずという。
- 9) Pneumatologica. 霊的實在に関する学。霊がものに魂を吹き込むことからこのような名称となる。
- 10) 地動説は古代からアリストアルコス等によって主張されていた。
- 11) ヴォエティウスはデカルト派の新哲学に対し, 基本的に「知ある無知」で対抗する。デカルトはこれを1642年1月レギウス宛書簡で痛烈に批判している。註(1)の拙訳参照。
- 12) Sebastiano Basso. 16世紀の医師。原子論者。
- 13) Lambertus Danaeus ないし Lambert Daneau (1530-1595)。フランスのプロテスタント神学者。当時最も重要な神学者の一人と見なされていた。
- 14) Hieronymus Zanchius ないし Girolamo Zanchi (1516-1590)。アリストテレス主義に基づく多くの著作を残した神学者。
- 15) Petrus Lombardus ないし Pierre Lombard. 12世紀の神学者。
- 16) Lambertus vanden Waterlaet (1619-1678)。ヴォエティウスの弟子の神学生。三つの系の討論すべての答弁者。後に, ヴォエティウスのレギウス批判文書の一つが彼の名によって出版された。1642年4月4日レギウスからデカルト宛書簡(AT-3: 561) 参照。